当財団の「アドミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

愛善社『芳譚雑誌』1879年

新メディアの雑誌をPRに活用

日本のPR誌の先駆けといわれる『芳譚雑誌』は、愛善社の発行で、1878（明治11）年7月1日に創刊されました。仕掛け人である九代目守田治兵衛（1841～1912年）は、東京・上野で薬局を営んでおり、胃腸薬「寶丹」の販売にさまざまなアイデアを凝らした先駆的な広告人です。『芳譚雑誌』は月6回発行され、全国の寶丹取り扱い店や書店で販売されました。内容は、美談、奇談、戯作文など多彩な文章とともに読者から投稿された寶丹効用談が掲載されています。明治初期に発足した新しいメディアである雑誌を、PRに応用する目の付けどころが斬新です。

第百号（明治12年11月21日発行）の本誌を開いてみましょう。

まず「芳譚雑誌」という欄で、「美談」から始まります。難病にかかった母を長年にわたって看病した岩手県花巻村の孝行息子とその妻の話から始まり、むさくるしい生業の貧しい大阪道頓堀の親子3人が、仕事に精を出し学問にはげみ仲睦まじく暮らす話。そして、伊豆国奈古谷村に住む分家の2人の息子が本家を敬い、数十年にわたり毎朝本家の安否を問い吉凶その他事あるごとに労をいとわず本家のために義務を尽くし、そのおかげか三家いずれも栄え、長く交誼を全うした話などが綴られています。この時代の家族、一族の結びつきの強さが表れていますが、ことさら「美談」として報告するのは、このような話を人々に訴えねばならないほど家族、一族の結束が失われつつある危機感が背景にあるのでしょう。

「芳譚余情」欄では、狂文亭春江の「吹雪の袖 第三回」が掲載されています。不義の過ちを犯し、いとま乞いをした雇い人の男女に、そっと新たな勤め先の紹介状と金を渡す奥方の人情話の一幕です。

「呵々漫筆」欄は、中坂迂人の「第百号ノ寝言」です。百の文字をちりばめた戯作で百号を祝しています。「百日咳」「百尺楼上」「百味ノ珍膳」「百人一首」「百鬼夜行」「百面相」「百方詮索」「百年目」「百日ノ説法」「百モ承知」などの言葉がナンセンスな文章をにぎやかに彩る漫筆です。

「続々新話」欄は、金衣散人戯稿による「盆栽會艶色根源（はなくらべいろのみなもと） 黄金の花 下の巻」です。主人の危難を救った経三郎という若者が藩主にその手柄を賞され、次第に重用されていく出世の物語に加え、芸妓との色事も描かれています。

「羇旅芳譚」欄の、篠田仙果「海坊主怪事の続き」は、まさに怪しい話です。「三十年ほど前の話。下谷中徒士町（したやなかおかちまち）二丁目に住む旧幕の徒士を勤めた何某の妻が、秋のはじめの午後余すぎ頃、摩利支天に参詣しようと三歳になる娘を背負い徒士町三丁目まで行った。急に背が軽くなったので不思議に思い、ふと空の方を見ると、今まで背に負っていた娘がフワフワと空中に飛翔しているので大いに驚いた。アレヨアレヨと呼び叫ぶうち、ついに姿を見失った。母はさながら狂気のように家に戻った。親族を集め娘の行方を捜したが死骸すら見当たらなかった。この話を見聞した者は、台風に逢ったのだろうと言ったが、その日は殊に麗らかだったという」

「寄書」欄の、正本作者 香雪山人戯述「没書塚千束倭文（もつしょづかちつかのかなぶみ）」は、愛善社編集部の様子を漫画風に描き、没になった恨みを大袈裟に述べ立てます。

『芳譚雑誌』第百号（明治12年11月21日発行）の表紙

転々堂の「滄浪痴論前号（そうろうちろんぜんごう）の続（つづき）」は、風呂に入る子ども連れの母親の挙措動作を、「ご新造様と仰がれる者の行い」「女房とよばれる者の行い」「嬶と罵られる者の行い」と、上中下三等の区別で評します。子どもに寒い思いをさせず、自分が衆人に肌を見られることなく注意を払っているご新造様の様子に感じ入っています。

華睡庵塘雨の「人は閑ある者に非ず」は、人は人生に暇を求めるべきではないという論を展開しています。

善行をたたえ、金壱円を贈る

「愛善社施與積金恵送廣告」は、愛善社が善行をした人それぞれに金壱円を贈ったことの報告です。○茨城県横堀村の士族藤村虎雄は、貧困の中を病にかかり80を過ぎた老母子どもとも6人暮らしで、朝夕の食事にも事欠く状況だったのを、12歳の次男巻太郎が車夫になり、母に後ろを押してもらい雨雪もいと

おかだ よしろう● 1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』(電通)、『観劇のバイブル』(太陽企画出版)、詩集『散歩』(思潮社)、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』(講談社)など。

わず家計を助けた孝行の件。○甲州津金村早川藤吉の養子義平は養父が病のために身動きできないので、貧しい中から医薬を求め、8、9里離れた市中まで父の好きな食べ物を買いに行き、自分は夜も寝ずに看護を続けている孝行の件。○和歌山元寺町南の町玉川おるい(22歳)は父が5年前に死去し、盲目の母を養うため婿を世話する人があるのに断り、機織りで暮らしを立て、貧しいうちにも母を介抱する孝行の件。○下谷同朋町の鳶人足長谷幸太郎は父・妻子供とも家内5人だが、病にかかり稼ぐことができなくなり、妻お豊は、昼に内職をし、夜は手遊びの人形を売り、自分は冬でも単衣(ひとえ)を着て家族を支え夫の看病をする貞操の件。

「物価」欄は、11月17日相場として、「和薬之部」「漢薬之部」「洋薬之部」「砂糖之部」に分け値段を表示しています。

「廣告」欄は、「宇津氏製金匱救命丸発売元　秋元惣兵衛製」の「とげぬき薬」の効能広告、「救命丸及び寶丹。寶丹水。精錡水ほか各家名薬売弘所大取次発売元 澤田源衛門」の「購買お望みの諸君には規則書お届け申し上げ候」という広告。「寶丹水発売本舗　岩浪長蔵」の「英国製ガラス早接ぎの水硝子」の広告などが掲載されています。

以上の本編に続き、付録のページになります。

百号を祝う、付録の多彩な内容

「愛善 寶丹書」と特徴のある書が掲げられ、その下に「続々新話の厄介者 前田鶯苑」が、百号のしゃれのめした祝い文をささげています。

次のページで、『芳譚雑誌』の考え方と愛善社の「施與金」の仕組みを紹介しています。

「まず芳譚雑誌は『五倫五常の道といって善行をした人の事実をそのまま記し、また貧窮の人があればお金を施す』ことを行います。これは社長の東京池之端の寶丹本家守田治兵衛という人がそもそも思い立ったことです。守田社長は先に三千円の大金を愛善社に渡し、これを資本とし、さらに篤志家の参加も受け入れ、施金を行っています。なお篤志家の金は銀行に預け利子だけを出金しているので必要があれば返金するためその人たちの懐は痛まないのです。参加者が多いのも至極道理です。毎月六回この雑誌が出るたび施金を送るのはとても手間がかかりますが、愛善社の幹事をしている栗田松三郎はじめ社中の人々が手数料もとらず奉仕しています」。この記事は愛善社の施金の仕方に共感し、10円を寄付した日本橋区の田村某の手紙の形をとっています。

巻末に何人かの祝辞が寄せられています。

仮名垣魯文「春秋至百の祝辞」は、さすがに格調のある文章で『芳譚雑誌』をたたえ、最後に歌を添えています。

〈九十九(つくも)がみすみ黒々と染めなして
蓁々(しんしん)たりや百(もも)の言の葉〉

転々堂主人の「祝辞」は、菊(きく)と効(きく)験、芳譚(ほうたん)と寶丹(ほうたん)が音通であり同じ音のため代用されることを語ります。そしてこの雑誌は「雑誌中の隠君子」であり、悪徳過失を暴くのでも卑野猥褻にわたるのでもなく大道に欠けた心の歪みを癒す菊の香の高いものだと述べます。

この第百号は、祝賀の雰囲気を醸し出しながらも、『芳譚雑誌』の特徴をきちんと押さえています。

九代目守田治兵衛が手掛けた「寶丹」の看板。ユニークな寶丹流文字が目立つ(明治時代)

九代目守田治兵衛は、当時の経営者の中でも抜きんでて広告への意識が高く、新聞や雑誌という当時の新しいメディアを戦略的に活用しました。また、書家としてもすぐれ、“寶丹流文字”といわれた独特のレタリングは、商品イメージの確立に多大の効果を発揮しました。

この『芳譚雑誌』には、守田の社会貢献の精神が発揮され、今日のコーポレート・フィランソロピー、CSRといった取り組みにもつながる事例としても記憶されるべきではないでしょうか。

＊引用箇所の表記は新字・現代仮名遣いに変更
＊タイトルと著者名が目次と本文で異なる箇所については、目次の表記を採用しました